

福岡大学病院歯科口腔外科における下顎埋伏智歯抜歯術後 感染予防抗菌薬の使用実態と手術部位感染発生状況 ～ガイドライン発行前後の推移～

中村 真輔¹⁾ 喜多 涼介¹⁾ 吉野 綾¹⁾
石田晋太郎¹⁾ 眞野 亮介¹⁾ 橋口 志保¹⁾
青柳 直子²⁾ 嶋村 知記²⁾ 瀬戸 美夏¹⁾
近藤 誠二¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部医学科歯科口腔外科学講座

²⁾ 白十字病院歯科口腔外科

要旨：2016年に「術後感染予防抗菌薬適正使用のための実践ガイドライン」が発行された。内因性感染源である口腔外科手術において術後感染予防抗菌薬（antimicrobial prophylaxis: AMP）の適正使用が求められている。

福岡大学病院歯科口腔外科において2016年4月から2020年3月までの期間に、外来および、入院下で行った下顎埋伏智歯抜歯時AMP投与された患者を対象とし、この期間における手術部位感染（surgical site infection: SSI）の発生動向を後ろ向きに観察・評価した。

当科は2017年からガイドライン準拠を開始し2019年に完全移行した。外来において第3世代経口セフェム系抗菌薬使用が約90%を占めていたが、2019年度には1.2%となり、替わってペニシリン系抗菌薬使用が約98%となった。入院症例においては、約98%がCEZを使用していたが、2019年度には、ABPCとCMZで95%以上を占めた。観察期間中全体でのSSI発生率は外来1.2%、入院3.7%であり既報を逸脱するものではなかった。またAMP変更前後におけるSSI発生率についても外来、入院ともに有意差はなかった。

下顎埋伏智歯抜歯時のAMP適正使用の正当性や感染対策の取り組みとして有意義であった。

キーワード：抜歯，手術部位感染，抗菌薬，術後感染予防抗菌薬，後ろ向きコホート研究